

# THE CENTER FOR SHIN BUDDHIST STUDIES 親鸞仏教センター通信

2016年3月1日発行

発行者 本多弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

ホームページ <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>

Facebook <http://facebook.com/shinran-bc>

2016.3

第56号

## われに帰る

親鸞仏教センター研究員 中村 玲太

ふと我に返る。日常に時おり訪れるありふれた瞬間である。まじめに仕事をしていたつもりが、いつの間にかネットのニュースめぐりに興じていた。そこでふと我に返って今費やしてきた時間は何だったのか……、と虚しくなる。こうした虚しさは誰しもが日常で経験するものであろう。

無意識裡になすべきことから離れ、本来の自己を見失っている状態に気づかされて本道に返ってくる。これが「我に返る」ということであろうが、今まで何をしてきたのか、という唐突に訪れる虚無感<sup>むな</sup>は決して欲のままに誘惑に負けていたときだけに現れるものではない。

むしろ、誠実に責務を果たしているときに感じる虚しさは鮮烈である。すべきことをしているはずなのにこれが自己の本分だとは思えない。費やした時間に対する虚しさや不安だけが残りながら、返るべき我がない。これはまじめであればこそ浮かんでくる自己の根本を問う問題である。

ところで、「まじめ」とは「真面目」と書くが、これは当て字である。江戸時代にはすでに「真面目」(=まじめ)という当て字は成立していたのであるが、「真地目」などの当て字も存在したようである。そうした数ある当て字は淘汰され、ついに

生き残ったのが「真面目」であった。漢字の音だけ見れば不自然な当て字であるが、本来の自己を意味する「真の面目」が「まじめ」として現在も通用しているのは、誠実さと自己との関係が課題として突きつけられているようにも思える。

真面目に生きるとはどういうことであろうか。禅では「本来面目」ということが言われ、これが何かが問われてきた。『織田佛教大辞典』(織田得能編纂)の「本来面目」の項には、「然らば何者か本来の面目、請ふ参せよ」という辞書らしからぬ解説がなされているが、「本来面目」とは安易な答えが許されず常に問われるものだけということだけはよくわかる。

浄土の伝統においても自己とは常に問われるものにほかならない。忘れし存在の故郷に帰れと呼びかける弥陀の本願は、まさに本来の自己を問わずにおれない欲求を呼び起こすものであろう。

帰るべき真に自己なるものを見失ってはいないだろうか。誤魔化さず自己を問い、自己の立脚地を希求していくことが自己に対しての誠実さであろう。これが真面目に——そして仏道に生きようとする事なのかもしれない。

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」③⑤

# 苦悩の場所で光に遇う

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第86回と87回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、この両回で第十七願成就文について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第84回から一部を紹介する。（嘱託研究員 越部良一）

## ■ 本当に自分が出遇<sup>あ</sup>ってたすかるかどうか勝負

出遇った仏教が本当に自分を解放するかどうかということ、自分の全力をかけて、自分の言わば命をかけて求めて、『無量寿経』こそが本当の仏教、真実教であると親鸞は信じた。あっちにも真実がある、こっちにも真実がある、比較してどっちかと、そのようなことではないのです。自分にとってはこれしかない。愚かな自分にとってはこの教えであれば自分を解放してくれる。そのようなことに出遇ったから、それまで学んできた比叡山の学びを捨てた。親鸞が尋ねて、これが真理だと言ってくださったその真理は、われわれのような愚か者にとって、今でも当てはまる。それ以後の人間が、とてもそこまでは掘り下げられないほど人間の闇を深く掘り下げてくださった。その真理性というのは、その親鸞の言おうとしたことを尋ねることで、われわれのような愚か者が「ああ、そうか、こういうふうに考えればたすかるのだ」という意味の真理性です。

つまり、本当に自分が出遇ってたすかるかどうか

かが勝負なのです。精神的な闇が開かれる真理性。これは客観的な真理性ではないのです。精神の明るみを求める心は、客観的な真理ではたすからないのです。いくら科学が客観的な真理を分析して、科学的に真理だと言っても、そのようなもので人間の心の闇は晴れないのです。心の闇を晴らすということは、人間がどういう存在であるか、自分は本当にどういう存在であるかが照らし出されて、「ああ、そのとおりでありました」と。何も無理することもないし、頑張ることもない。この通りの人間でありますと開かれることによってたすかるわけです。科学的に分析して、細胞が何億ありますか、なかの遺伝子がどうなっていますとか、そのようなことをいくら聞いても何もたすかりません。そのようなことは、どうでもよい。今、自分の心が暗いのをどうしてくれるのだ。そのような問題は科学的真理と違うわけです。そこが一番の問題です。

## ■ 苦悩の場所を生きていく

われわれはどこまでも暗い、どこまでも闇である。闇があっても、闇に苦しまないで、闇を引き受けて歩んでくださる法蔵菩薩が存在するということが、本願のはたらきとしてわれわれに聞こえてくると、阿弥陀の光が差してくる。ですから親鸞のような、自覚的に自分が罪業深重であることに苦しまれた方にとっては、この法蔵願心があるがたい。そして、阿弥陀の光が「南無阿弥陀仏」の名となって呼びかけてくださることが、自分のような愚か者にとっては本当に唯一の救いである

と。ですから法然上人が行くところなら自分は一緒に行きますと。もし、地獄に行くなら地獄に行ってもよいですと。地獄にも阿弥陀の光は来るのだと。そこまで信頼するわけです。自分は楽なところに行きたいのではない。苦悩の場所であろうと何であろうと、光に遇える、そういう場所を生きていくのだと。これが、親鸞の決断です。

これが、われわれにとっては大変勇気を与えられるのです。どうしても宗教というのは、苦しいから楽なところ、つらいから楽しいところ、暗いから明るいところに行ける。このようにイメージして、よいところに行けると考えてしまう。闇の人間に明るみが来ると教えるのですけれど、その明るみは本当は、闇が明るくなるというよりも、闇に苦しんでいた心が明るくなる。闇が単なる闇でなくなって、闇を生きることが自分の人生の意味になる。そういうことにおいて闇は単なる闇でない明るみの場所になるわけです。このような道が仏教の自覚だと思ふのです。

これはなかなかわからないことです。どうしても相対的に、暗いところから明るいところへ行けるのだと考えてしまう。それで教えを聞いたり、一生懸命求めたりするけれど、いつまでたっても闇が晴れない。それで、聞き方が悪いとか、努力がたりないとか、<sup>あ</sup>挙げ句の果てに教えが悪いなどと言って、たすからない。結局、それは、間違っている意識が<sup>ひるがえ</sup>転換され<sup>あ</sup>翻されるということが、なかなか自分のこととして受け入れられないのです。受け入れられないから、生きているうちはだめだ、死んでからだということを平気で言い出す学者がいるわけです。われわれの眼を翻しさえすればよい。どうやったら翻るのですか。自分では翻せない。人間の努力ではできません。本願が与えたいと言っているのです。その本願を「南無阿弥陀仏」を通して信じますという、その信じた心には、もう大涅槃はきているのです。ただこのこと一つを信じなさいと。そのような教え方が『無量寿経』なのです。(文責：親鸞仏教センター)

## 親鸞仏教センターの動き

(2015年11月～2016年1月) 一抄一

### ■ 2015年

- 11/7 国際仏教学大学院大学 平成27年度第2回公開研究会(国際仏教学大学院大学): 藤原研究員発表「日本古写経『弁正論』と親鸞『教行信証』」
- 11/9 第181回英訳『教行信証』研究会 第86回(通算第137回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 11/13 ご命日のつどい
- 11/16 第31回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会
- 11/17 第18回『西方指南抄』研究会
- 11/30 第159回清沢満之研究会
- 12/4 第11回研究員と読む公開輪読会「わが心深き底あり—西田幾多郎と浄土真宗—」担当: 名和研究員 ①12/4 ②12/11 ③12/18 ④12/25 (文京区・東京大学仏教青年会館)
- 12/9 第32回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会 第87回(通算第138回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 12/11 ご命日のつどい 平成27年度西山学会(禅林寺 永観堂会館): 中村研究員発表「「機法一体」説成立の再検討—證空における「往生正覚俱時」説を中心として—」
- 12/14 第19回『西方指南抄』研究会「天台本覚思想と親鸞」法華仏教研究会主宰: 花野充道氏(千代田区・フクラシア東京ステーション)
- 12/15 第182回英訳『教行信証』研究会
- 12/16 第160回清沢満之研究会
- 12/18 西山深草派宗学院研究発表会(浄土宗西山深草派総本山誓願寺): 中村研究員発表「證空における「光台見仏」論の成立」
- 12/21 第20回『西方指南抄』研究会
- 12/22 親鸞仏教センター報恩講

### ■ 2016年

- 1/8 ご命日のつどい 第11回研究員と読む公開輪読会「すでにして悲願います—『教行信証』「化身土巻」を読む—」担当: 藤原研究員 ①1/8 ②1/15 ③1/22 ④1/29 (文京区・東京大学仏教青年会館)
- 1/13 第33回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会 第14回親鸞仏教センター研究交流サロン「対話とは何か—哲学から現代社会への問いかけ」慶應義塾大学文学部教授、哲学者: 納富信留氏、埼玉大学名誉教授、経済学者: 暉峻淑子氏(千代田区・東京国際フォーラム)
- 1/14 第88回(通算第139回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 1/25 第21回『西方指南抄』研究会
- 1/27 第183回英訳『教行信証』研究会
- 1/29 第161回清沢満之研究会

### 掲載論文

- 1月 『中外日報』2016年1月6日付 名和研究員「西田幾多郎と『教行信証』—「聖典」各所に書き込み確認—



## ◇BOOK OF THE YEAR 2015◇

「活字離れ」が叫ばれている昨今、親鸞仏教センターではあらためて読書をととした新しい視点、言葉との出会いを大切にしたいと考えています。そこで、当センター職員が、2015年に出会った本をジャンルを問わずご紹介します。

### 『原爆供養塔——忘れられた遺骨の70年』

堀川恵子著 (文藝春秋、2015年)

われわれは、広島での原爆投下を知っている。そこで何万人もの犠牲者が出たことも知っている。しかし、その実態を知ることはない。一瞬で廃墟となった町には、その存在の痕跡をも消し去られた多くの人々がいる。

悲しみのなか、わずかでも記録を、記憶を残し、伝えようとした人々がいた。しかし、七十年という年月は、それすらも風化させようとしている。ただ、われわれはそれを知ろうとすることだけ是可以する。まかれた種はいつか芽を出すだろう。

(藤原智)

### 『親鸞と学的精神』

今村仁司著 (岩波書店、2009年)

清沢満之の「哲学者」としての側面を開拓したことで知られる西洋思想の研究者が、その清沢を「またとない案内者」として親鸞の思索世界にも接近。ことに「親鸞研究序説」と名づけられた第一部では、親鸞の原著『教行信証』を、日本人には希有な学的体系をそなえた「第一級の哲学書」として積極的に読解していく。

絶筆となった本書は、著者の「親鸞問題」をつづった一冊とも言えるが、数年ぶりに読み返し、自らが「今村問題」と衝突していたことに気づいた。(名和達宣)

### 『あるようにあり、なるようになる——運命論の運命——』

入不二基義著 (講談社、2015年)

運命論は動く——本書は、単なる運命論擁護でもなければ、反・運命論でもない。運命論、反・運命論の闘いに身を投じ両者を円環しながら、その両者を掘りおこす(切り崩す)。そこで掘りおこされた〈論理〉、〈様相〉、〈時間〉、〈言語〉、そして〈現実〉に照射されて、姿を変えゆく「運命」。

入不二氏は概念を丁寧分析しつつも、運命の

概念自体を動かしていく。ここに運命への新たな問いが見いだされてくる。致命的な問いが突き刺さった一冊。(中村玲太)

### 『知性の構造』

西部邁著 (ハルキ文庫、2002年)

昨年、同じ著者の『実存と保守』を読んでいたら、「この『知性の構造』に記された「観念図形」を描いて「いろんな人に意見を聞いてみたところ、まったくのチンプンカンと受け取られた」ので、それを公にするのを20年間封印した」とあって、本当に驚いてしまった。私にとってこの本は、社会思想の次元で、ヤスパースの言う「実存」を土台として(同じく)「理性」を縦横に働かせた、近代日本思想上、空前絶後の概念的思索の書である。(越部良一)

### 『小澤征爾さんと、音楽について話をする』

小澤征爾、村上春樹著 (新潮社、2011年)

美味しさを相手に的確に伝えるのが難しいように、五感の表現には困難が伴う。音楽もまた然り。いい音楽を聞いても、それを相手と言葉で共有するのは難しい。表現すべき語彙がないからである。

その表現をこの本は教えてくれる。村上氏の表現は音楽をかたちあるものとして、私に届けてくれた。小澤氏の音楽観、巨匠との交友関係にも驚くばかり。聞く耳も、文章も上達する一冊である。(田村晃徳)

### 『生きて帰ってきた男——ある日本兵の戦争と戦後』

小熊英二著 (岩波新書、2015年)

1944年11月20日。満19歳になったばかりの、とある青年のもとに入営通知が届いた。特別体格に恵まれていたわけでもなく、学歴が中学卒に過ぎない彼は、最底辺の陸軍二等兵として徴兵される。敗戦後、彼は旧満州でソ連軍の捕虜となり、シベリアに抑留され、強制労働に就かされながら、日本へ帰国できる日をひたすら待ち続けた。その生涯を聞き書きし、著者は「記録されなかった多数派」の生活史としてまとめ上げた。戦争に翻弄された、まさに「平均的な」日本人の姿がここにある。『生きて帰ってきた男』とは、著者の父・小熊謙二のことである。(法隆誠幸)

### 『経済の時代の終焉』

井手英策著 (岩波書店、2015年)

筆者は言う「私たちは、人間の多様性や生存の

基礎が経済的な価値尺度に掘り崩されていく時代にいる。理不尽さに対する無力感、閉塞感が先進国の社会全体を覆い尽くそうとしている。なぜ私たちはかくも経済の理論に屈服しようとしているのだろうか」と。私たちは新自由主義的な価値観に覆い尽くされ、生きづらさに身悶えしている。この「状況」から抜け出す道はないのか、「経済を飼いならす」ことはできないのか。経済成長至上主義社会に住む私たちにとって本当に豊かな社会とは何かということを考えさせてくれる一冊である。(大谷一郎)

### 『沙門空海』

渡辺照宏・宮坂宥勝著 (筑摩書房、1993年 (1967年))

空海に関する説話・伝記はきわめて多く、その数は親鸞を上回る。戦前に出版された空海伝のタイトルは例外なく「弘法大師伝」であるのに対し、戦後は「空海」が多く見られるようになるという。空海という人物に対する人々の認識の変化が推し量られる。

本書は、後代の文献を退け、伝説化した弘法大師から、「人間空海」へと目を向けた革新的書である。その人生に、とにかく引き込まれる。初版は1967年だが、いつ、何度読み返しても、「この一冊」に挙げたい一冊だ。(大澤絢子)

### 『曾我量深先生の言葉』

津曲淳三〔編〕 (大法輪閣、2011年)

「命より尊いものがなければ命の尊さはわからない。……身命よりも人間の命よりも尊いものがある。往生極楽の道という、命よりももつと尊いものがある。」(……は省略を表す)

「曾我量深先生の言葉」〈1〉は、この言葉からはじまる。編者の津曲淳三氏が、<sup>あ</sup> 思い難くして出遇われた曾我先生から、命を懸けて聞き書きされ、『在家仏教』誌に掲載されたものである。津曲氏は曾我先生との出遇いを「生きた法蔵菩薩に接し養育教化せられたのである」と述懐しておられるだけに、この一冊は、命よりも尊い、往生極楽の道を<sup>あきら</sup> 顕かにする金言で貫かれている。(中津功)

### 『昭和史のかたち』

保阪正康著 (岩波新書、2015年)

古き良き「昭和」という言葉が聞かれるようになってきた。映画「三丁目の夕日」に代表される懐かしい街並みの画。その「昭和」を多角的な面から考察されている保坂氏。この本を読むと、22

年間も生きた昭和を知らなさすぎた自分に出遇う。62年と2週間を、軍事主導体制の前期、占領支配を受けた中期、戦後民主主義体制で復興を遂げた後期の3つに分けるのも一考察だ。

さて、戦後70年が経過し、平成も四半世紀を過ぎて現在の、どのような歴史を刻んでいるのか。(金石励成)

### 『スクラップ・アンド・ビルド』

羽田圭介著 (文藝春秋、2015年)

言わずと知れた2015年話題の芥川賞受賞作。本書は、要介護の祖父とともに暮らす28歳の孫が主人公の家族小説。表面上、死を願いつつも、生へ執着する祖父。介護にストレスを感じつつ、「苦しみながらの生よりも穏やかな尊厳死」という建前のもと、祖父を死へ向かわせようとする孫。

同じ芥川賞受賞作の『火花』ではなく、本書を手にしたのは、「介護」というキーワードであったが、その問題とは別に、日常生活のなかで、揺らぎに揺らぐ心情から「人間」を考えさせられる一冊。(松扉達)

### 『ちいさなちいさな王様』

アクセル ハッケ著 (講談社、1996年)

私たちは無知の体で生まれだんだんと大きくなる。しかし、あるとき「僕」の前に現れた小さな王様の世界では、年を重ねるほどに覚えることも少なくなり、最後には目に見えないほど小さくなっていってしまう。「おまえたちは、はじめにすべての可能性を与えられているのに、毎日それが少しずつ奪われて縮んでいくのだ」。王様はそう言うけれども果たしてそうなのか。ぜひとも読んで想像にふけてほしい一冊。(大谷綾)

### 『希望のつくりかた』

玄田有史著 (岩波新書、2010年)

希望とは何だろうか。よく「希望がない」「希望をもて」などと耳にするが、希望という言葉が指し示すものは<sup>ひど</sup> 酷くあいまいでよくわからない。そう思っていたときに偶然本屋で目にとまった。

本書では、あいまいな希望というものを、社会学の立場から分析し、希望を単なる個人が抱くものに留めず、社会に密接に関係したものと考え、希望という視点から現代の社会問題を見ていく。

社会の有様と深く関係している希望。社会というものを考える上でヒントを与えてくれる一冊。(田鶴浦裕)



# 清沢満之における 「儒家的なもの」

—『臘扇記』を読む Vol. 3—

親鸞仏教センター研究員 名和 達宣

親鸞仏教センターでは、現在、1898（明治31）年8月から翌年4月にかけて書かれた清沢満之の日記であり、同時に重厚な思索ノートでもある『臘扇記』をテキストに考究を進めている。

『臘扇記』のなかで展開された思索をめぐっては、従来、「他力信念の確立」という一語をもって押さえられることが大勢であった。ところが、この書を読み進めるほどに、「天与」「天道」「天命」といった、いわゆる儒家的言語が頻繁に用いられていることに気づかされる。例えば、かの有名な「自己とは他なし。絶対無限の妙用に乗托して、任運に法爾に、此境遇に落在せるもの、即ち是なり」（1898年10月24日）という断想の六日前には、「絶対無限」について「而も彼の自在と此の不自在と、共に皆絶対無限（他力）の所為なり。共に是れ天与なり」という確認がなされている。このような思索は、翌年に東京の地で執筆された『有限無限録』では、より具体的な道德の問題に即して展開され、他力信仰の視座より儒家的「公」が確かめられるに至る。

そこで、これまで看過される傾向の強かった儒家的言語の意義を探究すべく、2015年10月30日に思想史家の子安宣邦氏（大阪大学名誉教授）を招聘し、「清沢満之における「儒家的なもの」」というテーマのもと問題提起をしていただいた。以下、当日の発題の要点を紹介する。

## ■清沢の儒家的思惟と言語

清沢の最後の信仰告白とも遺書とも言われる「我信念」末尾の言葉は、「私は私の死生の大事を此如来に寄托して、少しも不安や不平を感ずるこ



## ■子安 宣邦（こやす のぶくに）氏

思想史家・大阪大学名誉教授

1933年生まれ。日本思想史家。東京大学大学院人文科学研究科博士課程（倫理学専攻）修了。横浜国立大学助教授、大阪大学教授、筑波女子大教授等を歴任。日本思想史学会元会長。大阪大学名誉教授。

著書に、『歎異抄の近代』（白澤社・2014年）、『日本ナショナリズムの会読』（白澤社・2007年）、『本居宣長』（岩波書店・1992年）、『思想史家が読む論語』（岩波書店・2010年）、『伊藤仁斎の世界』（ペリカン社・2004年）、『平田篤胤の世界』（ペリカン社・2009年）、『「アジア」はどう語られてきたか—近代日本のオリエンタリズム』（藤原書店・2003年）、『国家と祭祀—国家神道の現在』（青土社・2004年）、『「近代の超克」とは何か』（青土社・2008年）、『和辻倫理学を読む もう一つの「近代の超克」』（青土社・2010年）など多数。

とがない、『死生命あり、富貴天にあり』と云うことがある、私の信ずる如来は、此天と命との根本本体である」である。なぜ清沢は、如来への信を「天命」と共に言うのだろうか。清沢の「信」が儒家的言語をもって表出されることを私は知っていたわけではない。

今村仁司の清沢論（『清沢満之と哲学』岩波書店、2004年）との関わりから清沢を読むようになった私は、『宗教哲学骸骨』『他力門哲学骸骨試稿』などを読むことから清沢を考え始めた。だがそれらは清沢の「信」にいたる手掛かりを私に与えることはなかった。「精神主義」の諸章を読み、『臘扇記』の文章から『有限無限録』『転迷開悟録』へと読み進めることを通じて、彼の言葉による「信」の開示を、私は驚きをもって見ることになった。驚きとは、その主要な文章が儒家的概念と言語とをもってつづられていることに対してである。ことに『有限無限録』の「仁義礼智信」の節を見て、なぜ明治32（1899）年の他力信仰の言



説が「仁義礼智信」を言うのか、驚きと疑いをもって考え込まざるをえなかった。だがこの清沢の儒家的思惟によった他力信仰の言説を読むうちに、これは仮借的修辭といたかりそめのものではない、必然性をもった内面的思惟の表出だと理解するようになった。

## ■ 儒家的教養／士道的エートスと自立的人格の形成

ところで、清沢のテキストにおける「儒家的なもの」について、清沢の解説者たちはそれを積極的に読むことをほとんどしておらず、それらは清沢の他力信仰的思惟とその言語的表出にともなわれる前時代の残留物か仮借的修辭とみなされている。しかし、儒家的教養や士道的エートスが、明治転換期に、その足跡を刻んでいった人々の人格形成のうえにもった意味を無視することはできない。幕末から明治初年の時期までに生まれた人々、ことに士族出身者が身に着けている儒家的教養と士道的エートスとは、明治近代における彼らの自立的な人格的存立を底深く規定し、支えているのである。それは、前近代の残留物や仮借的修辭などではなく、むしろ明治における自立的人格の形成をもたらした大事な要因である。清沢は終生『論語』や佐藤一斎の『言志録』を手放すことはなかった。そのことを明治人の遺習として笑うよりは、なぜ清沢がそれらを手放すことなく絶対他力宗の信仰者になり、教育者になったのかを考えてみるべきであろう。

## ■ 儒家的「公」概念の戦略的使用

儒家的概念は、清沢の他力信仰の究極相を言葉にするうえで不可欠なものであるようだ。すなわち清沢という絶対他力的信仰者は、真宗的言語とは異質な言語で他力信仰の思想的本質を解いてきたのである。これが、清沢を単なる教派的講説家以上のものにしていく理由である。彼は生来の思想的言語と言うべき儒家的言語を意図的に使っているのだ。『有限無限録』が見せる異様さは、二十世紀を迎えようとする当時の日本において、清沢が儒家的言語をあえて使用したところにある。私はそれを“儒家的言語の戦略的使用”と言うので

ある。

そして、清沢における儒家的言語の使用の意味がもっとも問われるのは、儒家的「公」概念の使用にある。『有限無限録』には「無限的行為は善なり（公の為にする行為なり）」、「公の天なり。公に尽すの心は仁なり、道心なり。公は彼を撰し我を撰し一切を撰す。故に公は大慈悲者なり。公の為にするものは大慈悲心を分享するものなり」といった文章が多く見られる。そこで用いられているのは、中国の儒家思想で展開されてきた「公」概念である。

だが問題は、明治32年の清沢が、この儒家的「公」概念による言説をなぜ展開したのか、あるいはこのような清沢の言説展開の意味をどのように考えるかである。この点は、すでに『歎異抄の近代』（白澤社、2014年）第3章「清沢はなぜ儒家的〈公〉をいうのか」のなかで私なりの解答を出している。それは、『教育勅語』という欽定の儒家的言語による国家・国民的な義務としての「公」、すなわち奉公的「公」の形成を見ることで、明治32年の清沢が「無限」「公」「天」という超越的、普遍的概念を前提にして道徳論的テーゼを導いたことの例外的な意味を理解しようとする道である。これこそが、晩年の清沢が苦闘した「俗諦」論の中心にある問題であった。

※清沢の言葉は『清沢満之全集』（岩波書店、2002～2003年）から引用し、原文で片仮名・旧仮名遣いものは、適宜送り仮名・句読点等を補いつつ、平仮名・現代通例の表記に改めた。なお、子安氏の講義は『現代と親鸞』第34号（2016年12月1日号）に掲載予定。



清沢満之研究会 於：AP 東京八重洲通り

# 天台本覚思想と親鸞

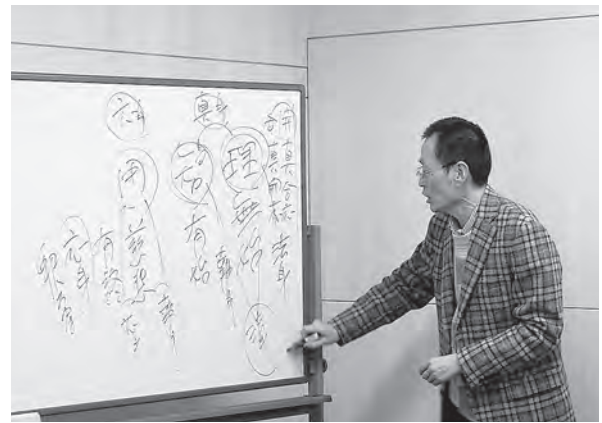
親鸞仏教センター研究員 中村 玲太

親鸞筆『西方指南抄』所収の『法然聖人御説法事』に、浄土三部經の教えは「娑婆のほかに極楽あり、わが身のほかに阿弥陀仏まします」と説くものだとする法然（1133～1212）の言明が載る。ごく当然の主張に思われるが、己心に浄土を、また弥陀を観ていくのがむしろ中国浄土教の主流であった。また、法然が批判対象とするいわゆる「天台本覚思想」にはこの傾向が著しく見える。この違いに法然の画期があり、法然が見据えた課題も見えてくる。そこで本研究会では、2015年12月14日、花野充道氏（法華仏教研究会主宰）を講師に迎えて、天台本覚思想を切り口に、現代仏教の課題も射程に入れた問題提起をいただいた。

## 序 学問と信仰

花野氏は天台本覚思想の検討に先がけて、現代向き合うべき「学問と信仰」について以下のような提言をされた。

現今の仏教研究は、仏教が本来もつ宗教性、すなわち、信心や修行、<sup>きと</sup>覚りや救い、祈祷や修法、現世利益や死者供養、といった行動や体験と切り離して進められているが、はたしてそれでよいのであろうか。そのような現状を評して、「仏教学ますます盛んにして、仏教いよいよ減ぶ」と揶揄されるのである。客観的な近代仏教学の成果を無視して、後ろ向きに、中世に確立された主観的な信仰世界に閉じ籠<sup>こも</sup>るか、それとも前向きに、客観的な研究成果をふまえて、高次の主体的な信仰の学問を構築するか、そのいずれかを選択すべき時代に入っている。教団で伝統的に用いている文献の



真偽について疑義が提出された場合、現代人の理性に耐えられるように、客観性をふまえた主体的な信仰主義（護教主義）に立って、反論できるものは反論するとともに、反論できないものは率直に認めて、歴史的事実に立脚した新たな信仰の学問を確立していく必要があると思う。

現代は、主観（信仰）と客観（学問）とを統一した、新たな信仰の学問の樹立を模索すべき時代に入っている。インド、中国、日本と展開してきた仏教思想をふまえて、主体的に自らの思想史観を提示するとともに、真偽論の最新の成果をふまえて、主体的に自らの信仰する祖師像を提示することが、これからの仏教研究、祖師研究の課題ではあるまいか。

## 1 天台本覚思想と親鸞

まず花野氏は、議論の前提となる本覚思想の研究史を概説された。

最初に本覚思想研究の重要性を指摘された島地大等氏は、「本覚門の信仰」（『思想と信仰』〔明治書院、1927〕所収）のなかで、多年の修行後に始めて覚る「始覚門の信仰」に対して「本覚門の信仰」を以下のように論ずる。

本覚門の信仰とは、現実の中に理想を実現して、現実を絶対肯定する信仰である。煩惱具縛の凡夫のまま覚り、また救われるから、凡夫のための仏教と言える。しかし煩惱の現実をそのまま肯定するから、墮落する危険性もある。（530頁、花野氏による要旨）



島地氏は、「本覚門の信仰」を日本仏教の特色とし、天台本覚思想を仏教思想上の「クライマックス」と評価する。親鸞については、「其の教学の内容に立入りて、之を抽象し来る時は、また中古天台の本覚思想と極めて相近似するを知らん」（『天台教学史』〔中山書房、1976〕、513頁）と論じている。

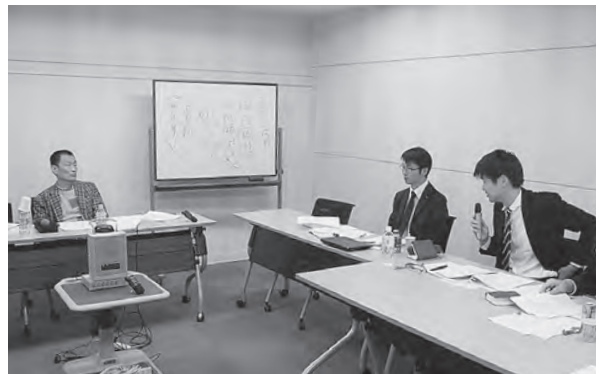
天台本覚思想と親鸞について、独自の見解を示したのは田村芳朗氏である。田村氏は『鎌倉新仏教思想の研究』（平楽寺書店、1965）の中で、「法然にくらべてみるときは、親鸞は、むしろ、この自他一如・絶対不二のほうを、表面にうちだしてきているといえよう」（529頁）と主張し、「親鸞の仏凡一体観は、聖道門のそれとは違うということがいわれるけれども、ともあれ、仏凡一体観は、他力の徹底からは生まれてこない」、「親鸞にあつては、仏凡一体が、もとをなしている。仏凡一体なるがゆえに、はからう要がないのであり、日常そのままよしなのである」（533頁）と論ずる。

このような田村説に対して、花野氏は弥陀を絶対的な仏と仰いで帰依するところに、弥陀の本願力に包まれて無我となり、仏凡無分別・自他一如（如来等同）の救済世界に入れるのではないか。むしろ仏凡一体の境地は、他力の徹底から生まれるのではないか、と提言された。花野氏の問題提起を受けて、法然と親鸞の違いをどう考えるのか、はたして凡夫が無分別の境地を証得できるのか、そもそも「仏凡一体」とは何か等々、研究会のスタッフ間で激論が交わされた。

さらに花野氏は、『大乘起信論』の理智不二法身説（合真開応説）と、天台智顛の理法身・智報身説（開真合応説）を説明して、親鸞の仏身論は理智不二法身説に属する、と論じられた。

## 2 仏教思想の本覚的展開

現実肯定の色彩を色濃く帯びた仏教思想が日本において花開く。これを花野氏は「仏教思想の本覚的展開」と呼ぶ。このような仏教の日本の変容を、(A) 大乘仏教の正統で必然的な展開と見るか、(B) あやまった展開で墮落と見るかは、意見の分かれるところであるが、日本において即身成



『西方指南抄』研究会 於：フクラシア東京ステーション

仏思想が重視されたこと、その線上に現実肯定の本覚思想が発達したこと、本覚思想をふまえて道元・親鸞・日蓮の仏教が成立したこと、などを指摘された。そして、現代日本の在家仏教化、僧侶の肉食妻帯なども「仏教思想の本覚的展開」としてとらえることができる、と論じられた。

花野氏の提言を受けて、日本仏教の墮落の側面も決して等閑にふしてはならないが、現実のこの「生死世界」を肯定する仏教思想が、なぜ今日まで脈々と宗教的生命を維持してきたのか、その思想史的意義を改めて問う必要があるのではないかと考える。

※花野充道氏の講義と質疑は、『現代と親鸞』第34号（2016年12月1日）に掲載予定です。



花野 充道（はなの じゅうどう）氏

法華仏教研究会主宰

1950年生まれ。天台本覚思想研究の第一人者。早稲田大学にて学位号取得（文学博士）。現在、法華仏教研究会主宰。

著書に『天台本覚思想と日蓮教学』（山喜房佛書林、2010）、『シリーズ日蓮』（春秋社、2014～2015〔第一巻から第三巻の責任編集者〕）。論文に、「日蓮の本尊論は大曼荼羅か一尊四士か」（『印度學佛教學研究』63巻第1号、2014）など多数。

ことになる、というのです。自分自身の底に潜む、いつから始まりいつ終わるとも知れないような「罪」の事実を悲しみ、痛むのです。「即発願回向」とは、「南無阿弥陀仏」を称えることがそのまま、阿弥陀の願っている「真実の世界」に生まれようと思うことになる、というのです。また、いつ、どのような場所で生きる人にもこの「南無阿弥陀仏」が与えられ、そのはたらきが広がっていくことになる、というのです。阿弥陀の願いのものと、おのずから、この世の苦楽を超えていく道が開かれるのです。「一切善根莊嚴浄土」とは、この「阿弥陀」という三字の名には、法蔵菩薩が積み上げてきた「一切の善根」（あらゆる「善のもと」となるもの）がおさめられています（注1）。ですから、「南無阿弥陀仏」という名号を称えることがそのまま、浄土を莊嚴することになる——つまりそこに、阿弥陀の願う世界が証されていくことになる——のだと知りなさい、というのです。こうした言葉でもって、智栄という方は善導を讀えていらつしやるのです。

〔注1〕

・『無量寿経』では、法蔵菩薩が兆載永劫の長きにわたって修行し、利他行として無量の功徳を積み上げたと言われる。阿弥陀の名が「一切善根をおさめたまえる」とは、衆生に向けられたその無量の徳行が、諸仏称名の願成就として、阿弥陀の名に初めからこめられているという意味である。

## 原文

唐朝光明寺の善導和尚の真像の銘文

「智栄讚善導別徳云 善導 阿弥陀仏化身 称仏六字 即嘆仏 即懺悔 即発願回向 一切善根莊嚴浄土」文

「智栄」ともうすは震旦の聖人なり。善導の別徳をほめたもうていわく、「善導は阿弥陀仏の化身なり」とのたまえり。「称仏六字」というは、南無阿弥陀仏の六字をとなうるとなり。「即嘆仏」というは、すなわち南無阿弥陀仏をとなうるは、仏をほめたてまつるになるとなり。また「即懺悔」というは、

### ◆仏をほめたてまつるになる

■諸仏称名の願、  
『大経』に言わく、設い我仏を得たらんに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して我が名を称せずは、正覚を取らじ、と。（二五七頁「行巻」『大経』）  
↑「咨嗟」ともうすは、よろずの仏にほめられたてまつるともうす御ことなり。  
（五四〇頁「一念多念文意」）

### ◆無始よりこのかたの罪業を懺悔するになる

■深心と言うはすなわちこれ深信の心なり。また二種あり。一には決定して「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫より已来常に没し常に流転して出離の縁あることなし」と深信すべし。二には決定して「かの阿弥陀仏の四十八願、衆生を撰受したまう、疑いなく、慮なくかの願力に乗ずれば定んで往生を得」と深信せよとなり。  
（四三九頁「愚禿鈔」）

### ◆即発願回向／すなわち安楽浄土に往生せんとおもうになる

■至心回向したまえり。かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得、不退転に住せん……  
■所有の善根回向したまえるを愛樂して、無量寿国に生まれんと願すれば、願に随いてみな生ぜしめ、不退転乃至無上正等菩提を得ん……  
（二三三頁「信巻」『大経』、『如来会』）

■「言南無者」というは、すなわち帰命

ともうすなり。いま、一乗ともうすは、本願なり。円融ともうすは、よろずの功德善根みちちてかくることなし。自在なるところなり。無碍ともうすは、煩惱悪業にさえられず、やぶられぬいうなり。真実功徳ともうすは、名号なり。一実真如の妙理、円満せるがゆえに、大宝海にたとえたまうなり。  
（五四二～五四三頁「一念多念文意」）

### ◆浄土を莊嚴するになる

■「正道の大慈悲は出世の善根より生ず」（論）とのたまえり。この二句は「莊嚴性功徳成就」と名づく。乃至「性はこれ本の義なり。言うところはこれ浄土は、法性に随順して、法本に乖かず、事、『華嚴経』の宝王如来の性起の義に同じ。また言うところは、積習して性を成ず。法蔵菩薩を指す。もろもろの波羅密を集めて、積習して成ぜるところなり。また性と云うは、これ聖種性なり。はじめに法蔵菩薩、世自在王仏の所に於て無生忍を悟る。そのときの位を聖種性と名づく。この性の中にして四十八の大願を發して、この土を修起したまえり。すなわち安楽浄土と曰う。これ、かの因の所得なり。果の中に因を説く。かがゆえに名づけて性とす。……大悲はすなわちこれ出世の善なり。安楽浄土はこの大悲より生ぜるがゆえなればなり。かるがゆえにこの大悲を謂いて浄土の根とす。ゆえに出世善根生と曰うなり、と。  
（三一四～三一五頁「真仏土巻」論註）



# 「善導大師の銘文」

智栄による善導最初の銘文は、私たちの耳には何とも奇異に響く。曰く、「南無阿弥陀仏」と称えることが「嘆仏」であり「懺悔」であり「発願回向」であり、また「莊嚴浄土」である、と。しかもそれらすべてが単に「する」ことではなく、「するになる」ことであると親鸞は言つ。称名は行為であつて、行為ではないのだ。

日々の生活にとつて、誰が、何をしたのか、あるいはするののか、という判断はとても重要だ。「あの事件を起こしたのは誰なのか」、「彼にはどんな業績があるのか」、「自分には一体何ができるのか」、等々。まして自由と平等が謳われる民主主義の世にあつて、「行為すること」の重みは私たちの意識を知らず知らずのうちに強く圧迫している。

しかし宗教的信の問題は、したか／していないか、の問題ではない。親鸞は、きちんと念仏できたか、信心を得たかどうかとは問わない。語られているのはただ、阿弥陀に触れたという一事、この身の底を破つて現れた開けの内実である。無数の行為が所在なくグルグルと回り続ける現代、お前は「どこに」生きているのか、との問いかけが聞こえてくる。  
(元研究員 内記洸)

## 現代語

「智栄」というのは、中国の僧侶で、人々に敬われた方です。その方が善導の格別にすぐれた徳を讃えられて、「善導は、この世界に現れた阿弥陀如来である」とおっしゃいました。善導を通して念仏に出遇つたのです。「称仏六字」というのは、「南無阿弥陀仏」の六字を称えるということです。「即嘆仏」とはつまり、「南無阿弥陀仏」を称えることが、そのまま阿弥陀仏を喜びをもつて讃えることになる、ということです。また「即懺悔」とは、「南無阿弥陀仏」を称えることがそのまま、人として生きることの「罪」を深く見つめる

南無阿弥陀仏をとなうるはすなわち無始よりこのかたの罪業を懺悔するにたとへるなり。「即発願回向」というのは、南無阿弥陀仏をとなうるはすなわち安楽浄土に往生せんとおもうことになるなり。また一切衆生にこの功德をあたることになるなり。「一切善根莊嚴浄土」というのは、阿弥陀の三字に一切善根をおさめたまえるゆえに、名号をとなうるはすなわち浄土を莊嚴するにたとへるべしとなり。智栄禪師、善導をほめたまえるなり。  
(『真宗聖典』五二〇頁)

### 《参考》(ページはすべて『真宗聖典』)

#### ◆善導は阿弥陀仏の化身なり

■阿弥陀如来化してこそ 本師源空としめしけれ 化縁すでにつきぬれば 浄土にかえりたまいにき  
(四九九頁「源空讚」)

#### ◆すなわち……になる

■「則」というのは、すなわちという、のりともうすことばなり。如来の本願を信じて一念するに、かならず、もとめざるに無上の功德をえしめ、しらざるに広大の利益をうるなり。自然に、さまざまのさとりを、すなわちひらく法則なり。法則というは、はじめて行者のはからいにあらず。もとより不可思議の利益にあずかること、自然のありさまともうすことをしらしむるを、法則とはいうなり。一念信心をうるひとのありさまの自然なることをあらわすを、法則とはもうすなり。  
(五三九頁「一念多念文意」)

ともうすみことばなり。帰命はすなわち釈迦・弥陀の二尊の勅命にしたがいて、めしにかなうともうすことばなり。このゆえに「即是歸命」とのたまえり。この発願回向之義」というのは、二尊のめしにしたがうて安楽浄土に生まれんとねがうところなりとのたまえるなり。  
(五一二頁「善導銘文」)

#### ◆一切衆生にこの功德をあたるに なる

■無慚無愧のこの身にて まことのころはなければも 弥陀の回向の御名なれば 功德は十方にみちたまう  
(五〇九頁「愚禿悲嘆述懐」)

■おおよそ八万四千の法門は、みなこれ浄土の方便の善なり。これを要門という。これを仮門となづけたり。……この要門・仮門より、もろもろの衆生をすすめこしらえて、本願一乘円融無碍真実功德大宝海におしえすすめいたまうがゆえに、よるずの自力の善業をば方便の門



## 第14回

### 親鸞仏教センター研究交流サロンを開催 (1月13日)

親鸞仏教センターでは、これまでご縁をいただいたさまざまな分野の有識者の方々と、共通のテーマをもとに意見交換できる場として、「研究交流サロン」を開催している。

第14回目となる今回は、東京国際フォーラム（千代田区）において、「対話」とは何か——哲学から現代社会への問いかけ——をテーマに、納富信留氏（慶應義塾大学文学部教授、哲学者）からの発題、暉峻淑子氏（埼玉大学名誉教授、経済学者）からのコメントの後、参加いただいた約40名の方々と意見交換を行った。

発題において納富氏は、「対話」を哲学的に定義したうえで、哲学者プラトンが師ソクラテスの対話を書籍化した著作「対話篇」に、「対話」とは何かを問う私たちへの重要なヒントがあると示唆。「対話篇」の考察から、語り言葉と書き言葉の相互関係を論じた。また、聞く相手がいないと言葉（対話）は成立しないという見解を示し、対話の要素として、「問い」と「答え」、「語る」と「聞く」などの日常行為について哲学的考察を加えた。

最後に、現代の問題として、言葉への信用や貧困など

を挙げ、「私とは関係ないという無責任な相対主義ではなく、理解し合えなくとも言葉を交わすことで生まれる真に自立した関係性が大切であり、現代の諸問題を克服する道として哲学がある」と提言した。

発題を受けて暉峻氏は、納富氏の問いかけに共鳴するとともに、筐子トンネル天井板崩落事故をはじめとしたさまざまな時事問題に見る対話の重要性を言及し、社会から対話が消失しつつあることへの危機感を語った。そして、「対話とは人間の本性にもとづいたものであり、組織や社会を回る尺度となる。今の社会に対話ほど大切なものはない」と訴えた。

意見交換においては、教育や医療などのさまざまな異なる現場・立場・視点から見る「対話」が語られたほか、「仏教の対話」という課題が挙げられるなど、「対話とは何か」という問いが深められ、それぞれの現場における新たな探究の出発点となる交流の場となった。



## リレーコラム

### 「近代教学の足跡を尋ねて」第6回 (山王台)

山手線駒込駅の南東に、古くは朝日山王宮とも呼ばれた日枝神社がある。大正5年（1916）11月、この「山王神社の附近で閑静な所」（『両眼人』）である山王台（現、駒込1丁目）に居を構えたのが曾我量深である。それは、京都へ行く金子大榮に代わり、雑誌『精神界』の編集の任に当たるためであった。

ところで、翌大正6年4月発行の『精神界』に、「教行信証研究会 会場、東京帝国大学山上御殿 時日、毎月第二第四木曜日午後六時より 講師、曾我量深氏」（申込先：鈴木弘）という記事がある。大正9年9月30日をもって満講となるこの研究会には、さまざまな人物が関わっていた。紀平正美、鈴木龍司、白井成允、伊東恵、小野正康、速水滉、木戸幡太郎、山本有三、宮本正尊……。それは「いつも俗人ら数人の静かに聞き求め味う会」（小野正康）、「清新な会合」（鈴木弘）であったという。『教行信証』の親鸞が、世に拡がっていったのである。（藤原）



高台にある日枝神社

## 行事日程のご案内

### ■ 親鸞思想の解明

日時：2016年3月10日（木）18時30分～21時  
4月 休 講  
5月9日（月）18時30分～21時  
会場：東京国際フォーラム ガラス棟（G棟）

### ■ ご命日のつどい（毎月第2金曜日）

日時：2016年3月11日（金）10時～11時30分  
4月8日（金）10時～11時30分  
5月13日（金）10時～11時30分  
会場：親鸞仏教センター会議室

上記共に、事前申込み不要・無料です。

## あとがき

今号には二つの研究会報告を掲載している。私が当センターにご縁をいただいて初めての講師を招いての研究会であった。両研究会共に今回は真宗とは異なる分野の先生をお招きし、問題提起をいただいた。異なる視点との交流は、新鮮であると同時に、当たり前としていたことや、考えていなかったことに目を向けるきっかけとなる。「研究交流サロン」（上段参照）を終え、こうした研究活動にも「新しい表現」を探求する「対話」の形があると感じた。新天地への移転を迎える今、あらためて当センター設立の願いを確かめながら、現代の問題関心とぶつかっていきたい。（松扉）